

大 乗 涙

昨年九月十三日、棟方志功画伯が亡くなった。足下に突如として巨大な空洞ができたような虚しさを味わった。病臥のことは伝え聞きながら、一度も見舞うことをしなかつた憾みは大きい。

私は、志功画伯の水墨の人物画を一幅愛蔵している。簡略な紙表装であるため、一部にいたみも出ているが、幸い絵は無事である。改装したいと思いつながら、これを表装したのが戦時中のことで、すでに乏しくなった材料を工面して、格別の便宜をはかってくれた表具師の顔が思い出され、つい思い切れないまま、そのままにしている。絵は縦三九センチ・横四五センチのもので、棟方氏が終生描きつづけた。豊麗な女人像である。卍の文様を散らした装ひたの装をなびかせて、左脚を立て膝にし、右脚を折り曲げて坐っている。顔はやや左向きになり、大きな眼はいっぱいに見ひらかれ、眉間に白毫があり、両手は胸のあたりで合わされている。ちょうど上半身にあたる部分に円形の光背が描かれている。

私が、棟方氏の中野区大和町一八〇番地の宅を訪れるようになったのは、昭和十五年の春・夏の交だったように記憶する。当時、われわれは月刊の国文学雑誌『文藝文化』を出していたが、

同年十月の通巻第二八号から第七〇終刊号までの表紙・カットはすべて棟方氏の手になるもので、肉筆と板画の両様があった。

あるとき、おそらく新しい表紙を依頼するためだったと思うが、棟方氏の宅を訪問した。用談がすんだあと、棟方氏は私の面前で黙って白紙をひろげ、筆をとっていきなりさきの絵を描きはじめたのである。どこから描きはじめられたかはおぼえないが、素人の私から見て、思いもよらない所から筆がつけられたことだけは記憶にある。絵を描きあげると、こんどは、向かって右上の空間に、「大乘涙」と大ぶりの文字を書き入れた。「涙」は当用漢字であるが、そのころは旧字体であったから、「大」は「犬」でなければならなかった。ところが、「乗」の左半分から下へ、二つの字画がかみあうほど近接して「涙」が書かれたため、「犬」の「、」を打つ余地がなくなつた。一瞬ためらつて筆を遊ばせる風だったが、いきなり、「涙」の上の空白に、大きな黒丸を、筆を廻しながら念入りに書き入れた。こんどは筆を翻して、左下に残された空間に、これも大字で「雑華堂」という雅号を記入し、その下に「棟」の角印を捺した。私は、神技とも思われる筆の運びに魂を吸いよせられるように、終始見守っていた。

大 乗 涙
この「大乘涙」の絵を描いてもらったのは、はつきりした記憶はないが、私の日記があいにく欠けている昭和十七年の後半ではなかったかと思う。たまたま、十八年一月一日の日記の末尾に、「大乘涙と棟方志功の書きくれし文字を掲げて年を迎へぬ」「屠蘇もなき年を迎へぬさはされど

大乘派とかかげ楽しも」と腰折れ二首を書きつけているところから、そのように推定している。「大乘派」の文字は、私の性格に対する頂門の一針として、私は絵とともに終生の重宝としている。それ以来、年が改まるごとに、書齋の床の間にそれを掲げて、威儀を正すのが恒例となった。やがて戦況が苛烈さを加えるとともに、人心の不安は蔽いようもなくなった。何かに心身を勞している間はよいが、休日などで、たまたま緊張がほぐれると、どうしようもない鬱屈に堪えぬこともあった。そういう精神状況の中で、棟方氏を訪れることも自然に頻繁になっていったようである。昭和十九年十一月二十六日（日曜）の日記は、次のように書きはじめられている。

午前中在寮。結局何すともなく過す。この頃心労多く、頭腦の張りが弱くなった。読書にも根気がつづかぬ。棟方志功氏の宅に電話すると、夫子自身が出てきた。今日午後一時頃伺ひたいといふと、在宅するから来いとのこと。会ふ前から勇気が身内に蘇ってくるやうだ。

当時、私の勤務していた学習院の昭和寮という寄宿舎に、家族を田舎に疎開させた者だけが住んでいたが、私もその一人であった。食糧難などの事情で、寮生を家庭に帰したあとが空いていたのである。「在寮」の「寮」は、そのような独身生活の場となった昭和寮のことをいい、新宿区下落合一丁目の高台にあった。その日は、同僚の宅で昼飯の御馳走になったり、警戒警報に出鼻をくじかれたりして、約束の時間が大幅におくれ、棟方家に着いたのは、すでに四時近かった。

そのころ棟方氏は代々木山谷さんやに住んでいた。

ちょうど畳替えの職人が入っている時で、棟方氏は備前産の花莫産の新品をわざわざ妒端に敷いて、そこへ私を請じ入れた。いつもより物静かに、しかし真摯に、つぎつぎと魂を揺さぶるような話をしてくれた。日記には次の二つの話を書きとめている。

○巾のある仕事がしたい。巾が同時に深みとなるやうな仕事を。深みという点からいふと、日本のものは行きつく所まで行っている。然し巾が足りない。深みから巾は生まれない。

○玉碎もよいが、あれをきいて、何だかほかない感じをもつ。本当の命の燃焼は、あんなにはかない感じを与へない。又戦争美術展の絵のやうに陰惨でもない。むしろ、我々に無上の歓喜と勇気とを与へるものだ。神風特別攻撃隊の人達の敵艦に突込むまでの精神の最高の状態の持続——ぎりぎりのところを持ちこたへる、あれが尊いのだ。突込む時よりもその方が尊い。

この日記の最後を、「久しぶりからつとした気持になって帰る」と結んでいる。

大 乗 涙
ある必要から、当時の日記を読み返しているが、外界の情勢に対応する私自身の精神状況が実に丹念に記述されているのに、われながら驚くことがある。それとともに、そのような状況の中で、棟方氏から魂の啓発を受けることがいかに大きかったかを確認し、これはまた格別のことだ

と改めて思っている。

ここに、当時の思い出の一端を記して、棟方氏追慕の切情を託した次第である。

(五一・四)